様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年３月３１日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９７２００３８
研究課題名（和文）　京都・大坂における書画会データベースの構築と絵画史的意義の考察

研究課題名（英文）　SYOGAKAI Held in Kyoto and Osaka in the Latter Edo Period.

研究代表者
岩佐　伸一（IWASA SHINICHI）
財団法人大阪市文化財協会・大阪歴史博物館・学芸員
研究者番号：70393288

研究成果の概要（和文）：近世後期の画壇を特徴付けるひとつの行為として書画会や展観会が挙げられ、国文学や美術史など多分野から注目されている。本研究では、江戸時代後期から明治初期にかけて、京都や大坂、名古屋や西日本各地で開催された書画会や展観会の事例集成を行い、700件を越える開催例を確認した。それらの事例を分析することによって、従前の言説とは異なり、京都や大坂では御抱絵師と町絵師が同一の書画会に参加し、席上で交わっていたことなどが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Most of the calligraphers and painters in the latter half of the Edo-period participated in SYOGAKAI（a pubulic performance by the artist ,making drawings or doing caligraphy before a group of spectators）and TENKANKAI.　In this research, I have given an outline of a collection of SYOGAKAI and TENKANKAI which were held in Kyoto, Osaka, Nagoya, and West Japan in the latter half of the Edo-period.　Up to the present few people have publicly presented any researach on SYOGAKAI and TENKANKAI in Kyoto, Osaka, Nagoya, and West Japan. In my research, I have confirmed that such parties had been held over 700 times. I have shown a list of basic data on SYOGAKAI and TENKANAI which were held　in Kyoto, Osaka, Nagoya, and West Japan in the latter half of the Edo-period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,000,000	0	1,000,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	210,000	1,910,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学　美学・美術史
キーワード：美術史　国文学　書画会　書画展観　京都　大坂

１．研究開始当初の背景

(1)　多数の人々の前で、絵師や文人が書画を制作し、作品を鑑賞させる書画会や展観会は、18 世紀後半から 20 世紀前半にかけて日本各地で開催された。近世期に着目すると、これらの会を契機に、池大雅「竹巌新霽図」や皆川淇園・司馬江漢他「東山第一楼勝会書画帖」などが作られ、前者は木村蒹葭堂と池大雅の絵画観の相違を、後者は寛政年間の京都画壇と近江商人の密接な関係を示す重要な作例として複数の論考の対象となっている。さらに開催時に版行された展観目録には開催意図や参加者名、出品作品名が記され、絵師の伝記や作画思想を考える際に、貴重な情報を提供する資料として絵画史研究に活用されてきた。

(2)　従来、限られた範囲ではあるが、書画会が果たした役割についても考察されてきた。小林忠氏は、書画会が「絵師交流の場」として機能したことを示唆し、近世絵画史上における折衷様式隆盛の一因となったとする。(「江戸時代の書画会」『江戸時代とは何か　徳川の平和』1985 年)。近代美術史は、書画会を展覧会制度の源流として位置づける（五十殿利治「美術の近代と美術家の行為」『講座日本美術史』第 6 巻、2006 年)。このように書画会は作品を生み出し、絵師の伝記や作画思想を明らかにする資料を残し、かつ時代様式を形成するに積極的な役割を果たした場、近代美術史の源流として認識されているが、いずれも概括的に触れられるにとどまっている。

(3)　書画会には絵師だけではなく儒者や文人も関わるため、他分野からのアプローチもなされる。国文学では「雅」文学に属するとされる儒者が、書画会を自己喧伝（＝「俗」）の場として認識していたことを指摘し、近世文学における雅俗の重層性を明らかにしたロバート・キャンベル氏の研究が注目される。芸能史からは、書画会参加者が「技」を披露する「演者」である点に注目し、氏家幹人氏は彼らに芸能者的要素を見出す。歴史学からは、杉本苑子氏が、渡辺崋山の書画会での人的交流と参加者の為政者批判を挙げて、身分を超越した意見交換の場として機能していた点を指摘する。

(4)　このように書画会は多方面から検討されているが、対象は寛政年間の京都と天保年間の江戸での会に限られる。私は、事例の集成により、絵師の伝記や作画思想はもとより、画壇の地域的な特質を明らかにする有効な資料とし考え、伝記的に不明な絵師の多い大坂画壇を対象に約 70 件の事例を集成した。これらを解析した結果、大坂で活躍した絵師の伝記に付加すべき条項を多数得、かつ、大坂の書画会では四条派絵師の主宰による追薦を目的とした会が多く行われていたことを確認した。これらは主宰者が流派継承の正当性を主張し、世間からの認知を得るために流祖の呉春や景文の追薦書画会を開催したと考えるに至った。

(5)　書画会の絵画史的役割を「絵師交流の場」と極めて重要な指摘をした前述の小林氏論考でも、数例を挙げるにとどまり、多くの事例を集成し、その実態を明らかにし、さらには開催主旨や地域、参加者、時代などに対して分析が加えられ、特性があるのかどうかが考究されることはなかった。本研究は、少数の事例で語られてきた書画会について多数の事例を調査し、それらをデータベースというかたちで提示することにより、絵師を中心とした広義の文人たちの伝記や作画思想の考察に新たな資料を提示できると考える。さらに得られた知見に絵画史的な視座による検討を加え「絵師交流の場」としての書画会の絵画史的機能に対する見方を実証し発展させるものである。本研究で制作されるデータベースは、他分野からの書画会へのアプローチを容易にし、学際的な議論の深化を促す。

２．研究の目的

本研究は、江戸時代中後期から明治時代初期までの京都、大坂、名古屋および西日本の諸都市を対象に以下の課題を設定し、その調査と解明を行う。如上の時代設定は、書画会が明治維新という政治的な変革を越えて命脈を保ち続け、その発生から終焉までを全体的に見通すためである。また地域設定は、従来研究が進んでいる江戸を除き、未だに手が着けられていない西日本諸都市での状況を明らかにすることにより、江戸との対比を可能にする。

(1)　引札や目録などの一次資料による書画会や展観会の基本事項－開催年月日、会場、

会主、参加者、出品者ーの集成。

(2)　当該時期・地域の随筆や記録類、書画会を描いた絵画資料を調査し、書画会の具体的様相を明らかにする。

(3)　上記(1)、(2)によって明らかになった書画会、展観会の開催が、流派の単独事業であったのか、または流派を超えて者の連携によるものかどうかを解析し、どの程度絵師交流の場として機能していたのかを明らかにする。

(4)　書画会、展観会が開催された折りに版行された引札や展観目録の検討から、会の開催主旨を明らかにする。従来、経済的理由で開催された事例ー曲亭馬琴古希書画会などーが強調されてきたこの種の会についての開催意図を分析し、地域的な差異が有るのかを確認し、あるとすれば地域の絵画に対する特性を考究する。

(5)　書画会、展観会の絵画史に与えた影響を総括する。

(6)　データベースの作成により、研究者が絵師の伝記にかかる条目を知りうることができるようにする。

３．研究の方法

(1)　本研究が扱う書画会に関する研究には、美術史学をはじめ、国文学、歴史学、芸能史からの先行研究がある。それらを行ってきた複数の分野の研究者からの情報を得て、会に関わる効率的な調査を進めた。

(2)　当該資料は、全国各地の図書館や博物館、文書館などの機関ならびに個人に収蔵されている。よって課題に於いて設定した地域の施設や個人宅において能う限り多くの資料を調査した。

(3)　従来当該研究では、開催の時に版行された目録や報条が主に対象となっていた。それら以外の資料も集成の対象とする。おおむね下記の形態をとる資料を対象とする。

①一次資料としては、展観目録、報条、記録類（日記、紀行文、随筆等)、書画会を題材にした書画、寄合画、席画、詩文類

②二次資料としては、自治体史（誌)、地域史関係書籍ならびに雑誌等

(4)　データベースの設計については、すでに美術史に関わるデータベースを構築している機関から、留意点を聴取し効率的に設計を進めた。

(5)　当該研究は、おおむね下記の計画で行った。

①初年度においては、一次資料に記された京都と大坂の事例集成、データベースの項目検討。

②第２年度においては、西日本諸都市、ならびに名古屋における事例集成、データベースの項目決定。

③最終年度においては、上方ならびに西日本以外の地域における主立った事例の集成とデータベースの試行。集成した事例の解析による地域的、時代的、人的な特性の明確化。

４．研究成果

(1)　事例集成と具体例の考究

如上の課題設定における書画会ならびに展観会にかかる事例の集成を行った結果、700 例を超える開催例を確認した。従前、当該研究に於いて、これだけの数を集成した例はなく、西日本における書画会の基礎的なデータを集成し得たと考える。

①従来、書画会や書画展観の内容については、安西雲煙『近世名家書画談』に依るところが大きかった。これによれば書画会は制作を、展観は鑑賞を重視すると会とされているが、それに類した会も多く開かれていたことを確認した。たとえば町人蔵品や京都祇園祭に伴う町会蔵品の曝涼、絵師主宰の試筆会や月並会、社中の展観等である。それらは書画会や展観会とも通じる要素を持つため集成の対象に含めた。

②如上の会に関わる資料は、主に展観目録や報条が主なものとして研究に利用されてきた。本研究でも、それらの所在を確認し、詳細なデータを集成することを基本にしたが、それら以外にも、書画会や書画展観に関する資料の存在を知り得た。主な資料としては、書画会を題材にした肉筆画や浮世絵版画、随筆、日記、詩文等である。一例を挙げると、江戸時代末期に版行された浮世絵「都百景」のうち「北水画　安井金比羅」には横山清暉主宰による松村景文追薦展観の掲示が描き込まれ、展観が当時の人々には馴染みの催事であったことを想像させる。また、畑柳平『不如學齋箚記』や『稲束家日記』、『書画便鑑』など絵画愛好者の手になる日記や備忘、平賀白山『蕉斎筆記』、広瀬旭荘『日間瑣事備忘』など絵師と交友のあった儒者の記録にも書画会、展観会の開催、参加にかかわる記載が頻出するが、これらを用いた書画会研究は従前なかったことであり、記事の豊富さから今後の活用が期待される。

③地域的には京都が２００件余、大坂が１００件余、名古屋７０件余と多くを占めていた。伊勢の津、紀伊の和歌山、土佐の高

知などでも１０例以上の開催が確認できた。三都三府ならびに国々の城下町やその近隣のほかにも、尾張起宿、摂津池田、豊後鶴崎など地域の要衝で開催されているこがあった。また美濃養老や但馬城崎など遊興の地での例もあった。また、課題設定の範囲外ではあるが、陸奥のうち現在の福島県域奥州街道沿いの都邑や甲斐甲府、上野国の街道沿い都邑での開催例も、各々１０例余が確認できた。

④従前、書画会や展観は、皆川淇園や龍草廬の発案により寛政年間にはじまったとされてきたが、本研究では、明和・安永年間には、江戸や大坂で開催されていたことを知り得た。これら初期の開催例にかかる詳細は不明なことが多いが、安永５年（1776）に大坂・浄照寺で開催された展観の目録『丙申書画展観録』が遺存しており、この時版行された展観目録は後年のものと形態や記載内容が似ており、この種の会の基礎的な形態は、安永年間にはおおむねできあがり、後年まで引き継がれていたことを確認した。寛政年間以降、開催例が増大し、定期的に開催される例が散見された。京都東山での展観は、寛政年間以降幕末まで存続したとされてきたが、その根拠は幕末明治に活躍した鈴木松年の回想によるものであったが、当該研究に於いては先掲の日記や備忘、記録類に開催が明記されており、継続して開催されていたことを確認した。時代が下るにつれて書画の制作や鑑賞が混在し、かつ他の遊芸－茶、挿花、琴、囲碁、将棋－も含まれるようになる。江戸時代末期以降は、煎茶会に書画展観が附属する形態も多く見られ、初発の時点に比べて、その形を大きく変化させていたことが明らかになった。明治時代に入り近代美術制度に則った「展覧会」が開催されても、なお各地で江戸時代と同じ形態や主旨による展観が開催され続けていた。

⑤開催主旨に目を向けると、初期の段階では絵画愛好者が、所蔵品を持ち寄り鑑賞する会と、同じく愛好者が絵師や文人を招き席上での揮毫を楽しむ例が多いことを確認した。時代が下るにつれて、名目が付され、絵師が主催する会では、流祖追薦や顕彰を名乗る会が多く見られた。その場合の会主は、子孫や有力な弟子であり、会の開催が、画派継承の正当性を示す手段でもあったことを窺わせる。従前、江戸では席画、上方では展観中心との見方もあったが、時代が下るにつれて、席画と展観が混在するため、必ずしも地域的に会の性格が異なるとは断定できない。しかし、事例の集成からすると、上方では、追薦を名目にした展観が多くを占めており、先述のように、画派の根拠地であったことが、大きな理由と考えられる。

⑥書画会や展観の関係者は、初期のうちは、主催者と参加者のみであったが、時代が下り会の規模が大きくなるにつれて、会の運営を担当する者－書肆や筆墨商－が関わりを持つようになる。それと共に会の性格も公開性を帯びるようになり、展観会では、作品批評の場としても機能したとの言が伝えられている。また、席上では複数の文人や絵師が同席し、交流を持っていたことが先掲の平賀白山や広瀬旭荘の記録類に明記される。従前、橋本雅邦「木挽町画所」（『國華』第 3 号）によれば狩野派の絵師は書画会に参加することを禁じられていたとされている。これにより狩野派の絵師は書画会に加わらなかったとされているが、本研究では、禁裏御用絵師鶴澤家や京狩野家が会主や補助となった書画会の事例を見出し、少なくとも京都や大坂では、江戸ほどの制約はなかったものと推測される。なお、昌平坂学問所の生徒には書画会への参加を禁じていたことが岡千仞『在臆話記』に記されており、江戸では幕府配下の絵師や学者などには参加への制約が有ったものと考えられ、ここに地域的な差異が認められよう。

(2)　データベースの構築

(1)において集成した事例を、容易に検索できるようにデータベースを構築した。その設計にあたっては、美術史学－金沢美術工芸大学附属図書館「絵手本データベース」－や国文学－国文学研究資料館「日本古典籍総合目録」－にかかわるデータベースを参考にした。

①データベースは、（ア）書画会・書画展観そのものを検索するものと、（イ）書画展観に出陳された作品を検索する、ふたつの大項目を設定した。

②前者（ア）は、年代、地域、主催者、展観名などを検索の項目とした。これによりいつ、どこで、どのような会が、誰により行われていたのかを検索することが可能である。

③後者（イ）では、展観目録に記載される一般的な項目である作者、作品名、作者居所、作品素材などを検索項目とした。これにより、どのような絵師が、どのような作品を展観に出陳していたのかを知ることができ、画家の経歴を調査する上で、役立つと考えられる。

④書画会や展観会のデータベース化は、国文学の分野においてもなされており、将来的には当該分野の研究成果を糾合することにより、データの増大を目指す。あわせて、資料所蔵者に、電子情報化ならびに公開の許諾を得、ひろく公開することが今後

の課題のひとつとなろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①岩佐伸一、松本奉時の経歴と画業について（一）、大阪歴史博物館研究紀要、査読有、第８号、2010、51－59
②岩佐伸一、美濃飛騨ゆかりの書画会・展観会資料の紹介、岐阜県博物館調査研究報告、査読無、第 30 号、2009、１－12
③岩佐伸一、十河節堂の『展観録』について、大阪歴史博物館研究紀要、査読有、第７号、2009、91－96
④岩佐伸一、唐画師・林門苑の作品より、美術フォーラム２１、査読無、第 17 巻、2008、4－9

〔図書〕（計１件）
浅野秀剛、鈴木淳、岩佐伸一他、八木書店、江戸の絵本－画像とテキストが綾なせる世界－、2010、379－411

〔その他〕
○アウトリーチ活動
展示発表
①特集展示　筆飛将軍　林門苑－異色の唐画師－、2010.2.24－4.5、大阪歴史博物館
②特集展示　唐画師・福原五岳、2009.2.25－4.6、大阪歴史博物館
③特集展示　松本奉時と近世大坂画壇、2008.10.3－11.5、大阪歴史博物館

口頭発表
①岩佐伸一、上方における俳諧一枚摺の絵師たち、2008.5.17、財団法人柿衞文庫
②岩佐伸一、上田公長の画譜について、大学共同利用機関法人　人間文化研究機構国文学研究資料館共同研究「日本古典籍特定コレクションの目録化の研究」研究会、2007.12.7、江戸東京博物館
③岩佐伸一、大坂の書画会、近代大阪美術研究会大会、2007.11.25、大阪歴史博物館

６．研究組織
(1)研究代表者
岩佐　伸一（IWASA SHINICHI）
財団法人大阪市文化財協会・大阪歴史博物館・学芸員
研究者番号：70393288